

私と超音波

高橋正一郎

富士吉田市立病院 内科



【略歴】

高橋 正一郎(たかはし せいいちろう)

1979年昭和大学医学部卒業、同、第二内科(消化器内科)入局

1990年富士吉田市立病院内科部長

2006年 同、副院長

私が初めて超音波検査と出合った記憶は、卒業後2年目(1980年頃)に初めて出張した総合病院でした。急にオーベンの先生から呼ばれて、新しい超音波診断装置を見せられました。リアルタイム(実時間表示)のリニア電子スキャンとのことでした。胆嚢が黒くはっきり写っていたのを今も覚えております。プローブを動かすとそれにつれて画像がかわるのが実時間表示だと強調されていました。これはスゴイと思いました。超音波は体に害が無いと説明されました。あとで内科部長の先生から「本当に害が無いのかあやしい。今後、害がでるかもしれない」などといわれて少し不安になったことを記憶しています。この病院には同期の米山啓一郎君と2人で出張したので、彼も超音波との出会いは、この時だったと思います。当時、胆石の診断は経口及び点滴胆嚢、胆管造影でしたが、はっきり言って大きな胆石以外はわかりにくい検査でしたし、胆嚢機能がなければ造影されませんでした。今思うとよく、そんな検査で診断していたものです。当時CTは頭部に用いられていましたが、撮影には約30分かかっており腹部には応用できませんでした。このような状況でしたから、私のなかで、超音波検査は救世主のようなイメージでした。早速、超音波の本を買って読みましたが、そこには「コンタクトコンパウンドスキャン」という私にとって意味不明な方法が多く紹介され、画像も違い、当初、理解不能でした。昭和大学病院に戻ったときに、調べたら院内で超音波検査を積極的に行っていたのが、外科の川内章裕先生でした。暗い部屋に、オシロスコープのような超音波診断装置(東芝SSL-53H)で、今では信じられないことですが、画像をフリーズする機能がなく、画面を動かさないようにしてポラロイド写真を撮影していました(写真1:胆石)。しかも、当時は超音波検査に興味を示す医師は、ほとんどおりませんでした。私の所属する第二内科では斉藤博文講師(故人)が1978年から検査開始し、2年目医師の検査デューティになっていましたが、年間20件ほどしか施行されておらず、当時の医局の中では忘れられた存在でした。私も出張から帰るまで気がつきませんでした。早速、私も検査を担当させてもらうようになり、手づくりのカイド冊子を作ったりして、医局で超音波の有用性を吹聴しました。翌年に新しい超音波診断装置を買ってもらえることになり、新機種が発売されるとのことで、東芝的那須工場まで見学にいった記憶があります。1981年に当時としては最新の超音波診断装置(東芝SAL-50A)が購入され、第二内科の外来で検査が始まりました(写真2:胆嚢癌)。1年後輩の石井誠先生も出張先で超音波検査を経験して医局に戻り、2人で週2回の定期検査を行いました。超音波医学会にも出席するようになり、その学会の熱気に圧倒されました。そのころ、ほぼ全ての演題に熱心に質問しているアクティブな医師がおり、びっくりしたのを覚えています(秋田の石田秀明先生でした)。同期や後輩の医師を中心に超音波検査の勉強会を始めて徐々に検査の有用性が認められるようになってきました。しかし、残念ながら当時、医師の人気No1は胃内視鏡検査でした。ちょうど直視型のパンエンドスコープが使用されはじめた時期です。1983年、外科の川内章裕先生が中心となって、昭和大学超音波診断センターが開設され、各科でバラバラに行っていた超音波検査を一箇所に集めてセンター化し、装置の維持、管理、購入を運営委員会で行うようになりました。毎年1回、記念講演会も行ない、有名な先生に特別講演に来ていただき、面識を持つことができました。また、昭和大学の様々な科の医師とも交流ができ、大学全体からの超音波医学会への発表演題も増え、学内外から評価されるにいたりました。その後も超音波内視鏡で西田均先生(現:西田医院)、カラードブラ断層法では米山啓一郎先生(現:昭和大学健康管理センター教授)などの仲間と、当時様々な検討を行った経験が、今も私の中ではいかされています。1990年に出身地である山梨県の富士吉田市立病院へ就職し、現在に至っております。昭和大学第二内科(消化器内科)では、石井誠先生(現:石井医院)、さらに佐々木勝巳先生(現:荏原病院)へと活動が継続されています。今回「私と超音波」で随筆文を書くというユニークな企画に感心し、昔の記憶が思い出されましたので、個人的な話ではありますが、その一端を紹介いたしました。

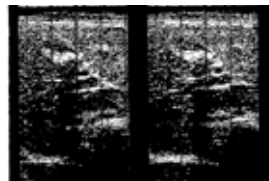


写真1:胆石

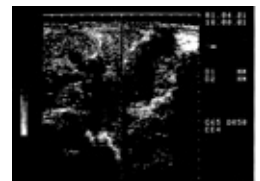


写真2:胆嚢癌